

武蔵野日曜集会

キリストの僕

――ロマ書第6章12～23節――

1978年6月4日(武蔵野)

小池辰雄

地獄か天国か 肉か霊か 永遠の生命 自己中心か神中心か 律法か恩恵か 聖霊によってか
くせざるを得ず 僕と王者 従順と義 十字架と聖霊 義認と聖化 矛盾構造 聖霊漬け 僕
の書 エホバの僕

【ロマ6・12～23】

12 然れば罪を汝らの死ぬべき体^{からだ}に王たらしめて其の慾に従うことなく、¹³ 汝らの肢体を罪に献^{ささ}げて不義の器となさず、反って死人の中より活き返りたる者のごとく己を神にささげ、その肢体を義の器として神に献^{ささ}げよ。¹⁴ 汝らは律法の下にあらずして恩恵^{めぐみ}の下にあれば、罪は汝らに主となる事なきなり。

15 然らば如何に、我らは律法の下にあらず、恩恵の下にあるが故に罪を犯すべきか、決して然らず。¹⁶ なんじら知らぬか、己を献^{ささ}げて僕^{しもべ}となりて、誰に従うとも其の僕たることを。或は罪の僕となりて死に至り、或は従順の僕となりて義にいたる。¹⁷ 然れど神に感謝す、汝等^{あるい}はもと罪の僕なりしが、伝えられし教の範^{のり}に心より従い、¹⁸ 罪より解放されて義の僕となりたり。¹⁹ 斯く人の事をかりて言うは、汝らの肉よわき故なり。なんじら旧^{もと}その肢体をささげ、穢^{けがれ}と不法との僕となりて不法に到りしごとく、今その肢体をささげ、義の僕となりて潔^{きよ}に到れ。²⁰ なんじら罪の僕たりしときは義に対して自由なりき。²¹ その時に今は恥とする所の事によりて何の実を得しか、これらの事の極^{はて}は死なり。²² 然れど今は罪より解放されて神の僕となりたれば、潔^{きよ}にいたる実を得たり、その極^{はて}は永遠の生命なり。²³ それ罪の払う価は死なり、然れど神の賜物^{たまもの}は我らの主キリスト・イエスにありて受くる永遠の生命なり。

●地獄か天国か

12 然れば罪を汝らの死ぬべき体^{からだ}に王たらしめて其の慾に従うことなく、¹³ 汝らの肢体を罪に献^{ささ}げて不義の器となさず、反って死人の中より活き返りたる者のごとく己を神にささげ、

「者のバ」とく」というのは「者らしく」ということです。



その肢体を義の器として神に献げよ。¹⁴ 汝らは律法の下にあらずして恩恵の
下にあれば、罪は汝らに主となる事なきなり。

この後半は、今読んだことの、要するに波状的な繰り返しです。罪の僕となるか、義の僕となるか、というこの大きな二つの「これか、かれか」という、「地獄か、天国か」というわけです。パウロの表現を見ましても、

「罪を汝らの死ぬべき体^{からだ}に王たらしめて」

と。罪を擬人化して、非常に力強い王者、この罪の王者はサタンです。もう少しハッキリ言えば、

「サタンを汝らの死ぬべき体の王たらしめるな」

というのと同じことになる。罪の主体はサタン。罪の主体のサタンは、何が一体その罪の本質かというと、傲慢です。傲慢が罪なんです。サタンというのは霊的なやつです。霊的傲慢というのが最大の罪なんです。この悪しき行い、かの悪しき思いなんていうのは枝葉にすぎない。これはマルチン・ルターが「マリアの讃歌」という中にもそのことを書いてます、

「霊的傲慢が最大の罪である」

と。霊的傲慢とは何かというと、神に逆らうことです。神への逆らい。非常なコントラストになる。

ここに「不義の器」と書いてあるでしょ。神への逆らいが要するに「不義」なんです。普通の常識では、不義というとか人間関係のうまくないことを不義なんていうけれども、聖書でいう不義というのはそうではない。神さまに対する不義です。義というのは神との関係において言われることなんだから。不義というのは神との関係が成り立たないことが不義。成り立たないとは何かというと、逆らうこと。成り立つのは何かというと、「従順」です。

福音の構造というものはしっかりとわきまえないといかんですよ。神学なんていわずにたっている。組織ではない。有機体的なんです。従順が義なんです。では、「義人」とは誰かかというと、キリストです。キリストは何かというと、神への従順を徹底的にした人です。非常にハッキリしている。パウロが、

「義人なし、一人だになし」

と言った。パウロは始めは霊的傲慢だった。霊的傲慢の親玉で、サタンの手下だった。だから、キリストを信する者を迫害していたでしょ。

「なんで、我を迫害するか！ とんでもない、お前は。けれども、お前の魂は大事な魂だから、私は引っくり返してやる」

と言って、キリストが傲慢から従順へ非常に鮮やかに移した。

パウロは始めは傲慢だった。それが聖霊のバプテスマを受けた。使徒行伝の9章、22章、



26章で三回告白している。彼はダマスコ途上で聖霊の霊撃に遇って、ぶつ倒された。クリスチャンが、なぜ、あのパウロの驚くべき回心のことを本当に驚嘆し、それと同質の体験をしようとしなにか。何もぶつ倒れなくなつていいけれども、180度の転回をしなくては。それをただ「信仰によって義とされる」「信仰のみの信仰」なんて、無教会はやっている。私は散々聞いてきた。信仰がお題目になって観念になつたらどうにもならん。

●肉か霊か

¹³ 汝らの^{したい}肢体を罪に献げて不義の器となさず、反つて死人の中より活き返り

たる者のごとく己を神にささげ、その肢体を義の器として神に献げよ。

「肢体」というのは^{からだ}身体ということ。 「プニューマ」(ギ)は霊。「ト・プニューマ・ハギオン」というと聖霊のことです。「プシヘー」それから「カルデヤ」は心。「ヌース」は悟性、理性、知情意の知のところ。こういうものを入れている物がある。それを「ソーマ」^{からだ}体という。体、心、霊、魂。理性、知性、知、いわゆる頭だ。これが「全人」「デア・ガンツェ・メンシュ」(独)です。

この全人が「ト・プニューマ・ハギオン」という「聖霊」を受けてない。この霊のところに聖霊を受けていれればいいけれども。受けていない場合に、それを何というかというと、「サルクス」と言う。これをパウロが「肉」と言っている。いずれローマ書8章でハッキリ出てきます。肉体ではないですよ。肉体は「ソーマ」です。パウロはこの「肉」(サルクス)という言葉をもたう少し幅広くは使つてはいますけれども、パウロが特に「肉」と言っているのはこれです。

ということ、自己中心ということです。エゴ。エゴイズムの自己中心の生れつきの「旧き我」。旧き我は肉なんです。旧人です。旧き人、外なる人。これはみんな「サルクス」という「肉」なんです。これがサタンの手下になる。我執だから。自我。自我的な我なんだ。我執にとらわれている。我執が罪なんだから。我執は神に従わないから罪なんだ。その存在の全体の向きからいうんですよ、罪とか、罪でないとかいうのは。罪というと、すぐ何か悪いことをしたとか、悪い思いを考えたとか、枝葉のいろんなものを罪と言いつけれども、本当の罪はそうじゃない。本当の罪は自我そのものなんだ。失われたる我、「フェルローレネス・イツヒ」(独)だ。失われたる我。パラダイス・ロストの存在だ。

ミルトンが『パラダイス・ロスト』(失樂園)の最初に、人間の最初の不従順、「デスオビエデエンス」が罪をもたらしたという。まあ、大したもんですよ、あの「パラダイス・ロスト」という詩は。盲人があれだけの驚くべき内容のものを書いたのだから。ミルトンは、聖書はもちろん、ギリシャ、ラテンの古典を全部征服してしまつて、それから彼は書いたんです。



●永遠の生命

ところが、肉でない霊的^{いのち}生命がある。それは「ゾーエー」「生命^{いのち}」という。

「我は生命なり」

というあの「生命」は「ゾーエー」です。ときには、「プシヘー」という字も生命というよ
うな意味に訳すこともあります。ヘブライ語の「ネフェシュ」という字です。

「ト・プニユーマ・ハギオン」という聖霊がやってきて、聖霊中心となったときに、その
人は「ゾーエー」なんです。「永遠の生命」「ゾーエー・アイオニオン」を持っている。
「霊」ということはどういうことかという、聖霊が中心となっている事態を「霊」「霊的」とい
う。聖書でいう「霊的」というのは、聖霊がなければ「霊的」なんて言っ
てはいかんですよ。心霊的と間違えられてしまう。

「霊と肉」とパウロが分けているのは全存在^{ぜんざん}です。身体まで全部ですよ。聖霊が入って
くと、この全人^{ぜんじん}そのものが「霊」なんです。魂だけが霊なのではない。この「プニユーマ」
は今言った「霊」ではない。間違えないように。私たちの人格の中心の霊というの
は一番高次なところ。けれども、それも全体が自己中心^{じこしん}であるかぎり、「肉」なんです。この
霊も肉の一部分。それが「旧き我」。どんなにそれが立派そうにみえても神を立ててない
のはダメです。だから、ダンテがギリシアの立派な人たちもみんな地獄に入れている。地
獄の特別な圏に居る。そんなのは地獄の範疇^{はんしゅう}だと言う。「天国か、地獄か」というのは、「神
中心か、サタン中心か」、仏教でいえば「如来か、閻魔^{えんま}か」というわけだ。

ギリシア人は、

「魂が肉体の虜^{とりこ}になっ
ていて、魂は永遠的なものであつて、やがて肉体の桎梏^{しづこく}から外れていく」

と思っ
ているけれども。ソクラテスにもそのくらいがあつた。けれども、ヘブライのユダヤ人は全人的な把握なんです。ドイツのゲーテという詩人はこの全人的な方向の把握をした人です。全く聖書的とは言えませんが、しかし、非常にその方向は似たものを持っている。

神秘主義者たちは、この「ト・プニユーマ・ハギオン」(聖霊)がいきなり神の霊になつてしまつて、キリストが媒介となつていない。それが神秘主義者たちの神人合一のところ
です。しかし、パウロ的な神秘というのはキリストがハッキリ立っている。十字架が立っ
ているんです。十字架の贖いがなくしてはパウロ的な神秘というものは言えない。パウロが、

「我れキリストと共に、キリストのうちに」

と言っ
ているときにはみな、十字架の贖いを通して、十字架の贖いなしにいきなり、神人合一のことはパウロは言わない。それは彼は徹底的に罪の認識をしているから。パウロは自分を、

「我は罪びとの首^{かしら}」

と言った。

「自分は悪い野郎だ。俺はサタンの手下で、自己中心で、靈的傲慢だった。とんでもないはなしだった」

と言うので、パウロはハッキリしている。普通は間違えて、「聖霊、聖霊」なんて言っているが、聖霊というのは十字架抜きに聖霊だと思っているのは、とんでもないはなしだ。

●自己中心か神中心か

「靈的傲慢の、サタンの手下になるな」

ということですよ。神さまが与えていらつしやるいろんなものがある。食欲だとか、肉欲だとか、いろいろある。肉欲そのものが悪いのではない。神さまが与えている一切の機能は結構だ。結婚もみな祝福されている。ただ、それにとらわれて、それ中心になっているような行き方をするからいけないので、それを「罪」という。人間の一切の賜りたるものは神中心に動いていくときには、それが正しい意味において用いられていくときには、全部これは靈的なんです。

「ご飯を食べることも靈的な食べ方をしろ」

というのはそのことです。キリストはいわゆる禁欲主義ではないですよ。そういうことは間違えないように。内村先生の『ローマ書』を見ると、ちよつとそこがハッキリしないところがある。ルターは、そこはハッキリ分かつてます。

「いわゆるカトリック的な聖ということとは本当の神聖ではない。それだったら、私は修道院の僧侶として救われたはずだ。修道院的敬虔が自分を天国に持つていくのならば、

私は最初に天国に行つただろう」

なんてルターは言っている。いわゆる修道院的な敬虔ではないと。彼は、こちらでいうと親鸞と同じだ、尼さんと結婚したわけですよ。いいですか。本当にキリスト中心ということと、人間的な清い清くないの、正しいの正しくないのと、そういうことではないという事です。

●律法か恩恵か

¹³ 汝らの肢体を罪に献げて不義の器となさず、

そういった靈的傲慢の罪というものに献げて、「不義の器」、即ち不従順の器となさず、

反つて死人の中より活き返りたる者のごとく

即ち、キリストのものらしく、

己を神にささげ、その肢体を義の器として神に献げよ。

従順の義の支配するところの体として神に献げよと。「義」という言葉は別の言葉でいうと、従順ということですよ。「神に献げよ」は、「キリストに献げよ」でもどっちだっていい。



¹⁴ 汝らは律法の下にあらずして恩恵の下にあれば、

律法の下ではない、「すべしすべからず」の下、モーセの下ではないと。「恩恵」即ちキリストの恩恵の下にあるから。キリストの恩恵は即ち「十字架の贖いと復活の生命」、これが恩恵の内容です。

罪は汝らに主となる事なきなり。

普通は、こういう言葉を読んでも、それだけしか分からない。ところが、今、私が言っている通り、この「ト・プニユーマ・ハギオン」というものが入ってこなければ、義の器になれないということをハッキリしていただきたい。「恩恵の下にあるから」と、ただ観念的に思っていたってダメです。聖霊の人は最もどん底に立つ人です。最も低い人、最も貧しい人なんです。だから、

「幸いなるかな、霊の貧しき者」

というのは、本当に聖霊をいただいている人が最も霊が貧しい。普通はそういうことが分からない。

「聖霊をいただいていると、霊的に豊かではないか」

なんて。聖霊は豊かですよ。しかし、人間そのものはひとつも豊かではない。人間そのものは本当に何も無い。だから、私は「無者」と言う。無者であるということが実は、聖霊における無限無量者である。それでなくて、もし自分が、

「霊的に私は豊かになった」

と言っていると、ヘタするとこれはサタンになりますよ、霊的傲慢になる。

「私は空っぽだから本当に楽だ」

と言う。楽なところにももの凄い力がくる。その境地をやつと私はつかんだわけだよ。皆さんは、あまり早取りしなくなつていいよ、若い人は。あまり早取りすると、ヘタすると引っくり返ってしまうから。けれども、その気持ちはだんだん分かってください。

● 聖霊によってかくせざるを得ず

¹⁵ 然らば如何に、我らは律法の下にあらず、

「すべし、すべからず」という、そういう下にはない。これは「すべし、すべからず」を既に支配する世界です。律法はなにも悪くはないですよ。「すべし、すべからず」は結構なんです、法なんだから。法を無視してはいかん。「すべし、すべからず」と外から言われなくても、「ざるを得ず」という世界が出てくる。「ざるを得ず」というのは、

「聖霊によって、かくせざるを得ず」

という天的必然が出てくる。これが自由なんです。だから、いわゆる「すべし、すべからず」と外から拘束されるのでは、いくらそれをやったって、それは本当に生命の世界に入らない。これはパウロもマルチン・ルターもさんざんそのことを経験した。



道德の世界は、始めは大事です。小学校、中学、高等学校くらいまではしょうがないよ、「すべし、すべからず」はやらなければ。私は学校でいきなり福音を説いても、どうにもならんよ。福音の見地から私はものを言ってますけれども――ある時はズバリと言いたくなるけれども――そこらはわきまえているから。法の世界はまず自分で大いにやってみるさ。自分の鍛練で、道德的鍛練のある程度までやらなくてはならないさ。しかし、道德的鍛練では本当の生命は来ない。

それで、もうひとつ次元の高いところに入ると、その鍛練したことが空しくない。それがまた別な力になって働いてきます。

「ああ、もう私たちは道德は要らないんだ」

と言つて勝手なことをしたら、パウロがちゃんと、

「決して然らず」

と言っているんだ。

恩恵の下にあるが故に罪を犯すべきか、決して然らず。

と。「すべし、すべからず」をいい加減にしていゐるか。決して然らず。でたらめか。決して然らず。八方破れだが、しかしながら、でたらめではない。

「罪は汝らに主となる事なきなり」

という。自己中心になつたら、聖霊の世界からズレます。自分で分かります。ダメになることが分かります、自己中心になつたら。「罪を主たらしめるな」とは、もう少しハッキリ別な言葉でえば、

「自己中心になるな。エゴイズムになるな」

ということだ。ところが、どうですか。大体がみんなエゴイズムで動いているね。相対的人間というものはみんなエゴイステックなものなんだ。

「人のためにやりなさい。人のために思いなさい」

なんて、ある時は瞬間的にはできるかもしれないが、何か自分の気持ちで無理しているよ。うだ。自分の気持ちで無理でなくて、本当に人を救っていくことが、人のためにやることが楽しくなるというのが、やはりこの聖霊の世界に来ないと、本当の味が出てこないね。私はいわゆる無教会クリスチャン時代は、ある程度はうれしさもないとは言えなかったけれども、しかし、本当の世界は御霊の世界です。

「敵を愛せよ」

「はい、愛せます」

と言える。ということは、「愛する」とは敵を「担う」ことなんだから。御霊の力で助けましょう。けれども、なかなか敵は背く。背いたって失望はしない。「ああ、かわいそうだな。気の毒だな」くらいにしか感じない。



●僕と王者

パウロが徹底的にキリストの弟子になったら、無限無量、自由自在になった。もうパウロの実存が表わしているでしょ。使徒行伝を見ても、書簡の言葉を見ても。徹底的に弟子になったら、僕になったら、なんと驚くべき王者であるかと。これはマルチン・ルターが『クリスチャンの自由』でそのことを言っている。徹底的に僕になると、徹底的に本当の王者になるし、本当の祭司になる。

そういう意味における僕なんていうものは普通の世界では分からんです、いわゆる民主主義なんて言っているうちは。民主主義なんて言っている連中は自我が強いね。「自主、自主」なんて言っている。民主主義は悪くはないですよ。悪くはないけれども、民主主義を本当に民主主義たらしめるものは何かというと、この福音が分かってないから困る。

「本当の自主とは何か、本当の自由とは何か」

ということ。僕という、人のために尽くすという、そこを持たなければ、本当の自主、自由はダメなんです。ということは、本当に僕となるということは人を担うということなんだから。屈從的に僕になっているのではない。女の方なら、婢女はしためと言ったって何だっさいですけども。そうすると、パウロの言っている言葉が本当に内側から読めてくるでしょ、内側から。

¹⁵然らば如何に、我らは律法の下にあらず、恩恵の下にあるが故に

モーセの律法の下にはもうないと。律法をいくらやろうとしたって、みんな落第する。もう私は律法の落第生だ。しかしながら、キリストの新しい律法の世界に入ったら、今度は、古い律法の及第生になってしまふ。福音のことを「新しき律法」と言う。どこかにそういう言葉があるよ。

恩恵の下にあるが故に罪を犯すべきか、決して然らず。

キリストという恩寵ですよ。

「キリストが何か恵みをくださいました。私はこういうことで恵まれました」

と、そんなことを言っているではないですよ、この「恩恵」というのは。聖歌の中に、「恵みを数えよ」なんていう文句があったね。あれは私はあまり好きではない。数えたって悪くはないけれども。そういうことにこだわってはいかん。結果だの、現象にこだわってはいかん。結果や現象をありがたく一応思うことは、それは結構なことです。しかし、ヘタすると、それにこだわると、これは御利益信仰になる。いろんなことを通して、結局、何かというと、キリストと直結して深く入っていくことだけが目的なんです。そうすれば、それからもう何でも出てくる。

何であつても、キリストに在る自分というものを本当に告白していかなかったら、キリストの僕ではない。それは本当に強い。強いというのは、なにも偉がっているのではない。キリストが強いんだから、天下無敵なんだから。



●従順と義

16 なんじら知らぬか、己を献^{しもべ}げて僕となりて、誰に従うとも其の僕たることを。

或は罪の僕となりて死に至り、或は従順の僕となりて義にいたる。

とパウロは言っている。ギリシア語もそれ式に書いてある。それはそれでいいけれども。「罪の僕となりて死に至り」というけれども、罪の僕自身が死です。罪の僕となっていれば、もうそれは死です、ダメなんです。「従順の僕となりて義にいたる」ではない。従順の僕であることが既に義人なんです。ということは、キリストの義をいただいているから。キリストの義は従順なんだから。キリストの義をいただかなければ、従順の僕にはなれない。自分で少し低姿勢になって従順でございますなんて、そんなものはひとつも従順ではない。本当の従順というのは、キリストの従順をいただくんです。

「8 既に人の状^{さま}にて現れ、己を卑^{ひく}うして死に至るまで、十字架の死に至るまで
順^{したが}い給えり。」(ピリピ2:8)

とピリピ書2章に書いてある。あの「死に至るまで順いたまえり」という、十字架の死まで貫いたところのキリストの徹底的な神一切、聖意一切。神の意志、聖意を體現した。聖意、意體現というのが従順ということですよ。聖なる神の意志を體現すること。

地上で「聖」という字を私たちは私してはいかん。「聖徒」という言葉もあるけれども、あまりうつかり使わない方がいい。聖は神のものです。イザヤ書で神さまのことを「聖者^{しょうじや}」と言っているが、人間のことを聖者とは言っていない。カトリックは聖徒^{しょうじ}というのをたくさん作っている。聖アウグスティヌスなんて言うが、彼は迷惑するよ。「俺はいわゆる聖ではないぞ」と。聖は賜っているものだ。

この聖意を體現したのがキリストです。その聖意體現というのは要するに、従順を徹底的にやったから。ピリピ書2章7節、

「7 反^へつて己を空^くしうし

「空しい」というのは「ケノーシス」という字です。

僕の貌^{かたち}をとりて人の如^{ごと}くなれり。

「如く」と言ったって、「人のようだ」ではなく、「人となった」ということ。

8 既に人の状^{さま}にて現れ、

普通の私たちと同じさまで、生れつきの肉と同じことになってしまった。キリストは、生れつきの肉と同じ肉を持った。しかしながら、彼はいわゆるパウロが言っている「肉」ではない。

己^{ひく}を卑^{ひく}うして死に至るまで、十字架の死に至るまで順^{したが}い給えり。」(ピリピ2:7-8)

と。この姿が「霊」なんです。「霊的」とはこういう姿を言う。これの反対が肉的と言う。ヘブル書5章8節に、



「⁸彼は御子なれど、受けし所の苦難^{くるしみ}によりて従順を学び、⁹かつ全うせられたれば、凡て己に順^{したが}う者のために永遠の救の原^{もと}となりて、¹⁰神よりメルキゼデクの位に等しき大祭司と称えられ給えり。」(ヘブル5:8)

とある。ヘブル書はヘブル人に本来の意味の大祭司とは何か、祭司とは何かということ徹底的に語っています。これは大事なところですよ。「永遠の救の原^{もと}となった」と。ここには「従順、従順」と書いてある。「己に順^{したが}う者」という。

●十字架と聖霊

では、キリストに従うにはどうしたらいいか。御^い霊にあつて、キリストと一如になることです。

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

というこの一如の世界に入ったら、本当に従うということが楽にできる。まだ自分で力んで従っているうちはダメですよ。

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

「われキリストと共に十字架せられたり」

と。もう何といったって、ガラテヤ書2章21節だよ。

「われキリストと共に十字架せられたり。もはやわれ生くるにあらず。キリス

トわがうちに在りて生き給うなり」

これはハッキリ、十字架と聖霊ではないですか。「キリストわがうちに」とは何ですか。

「キリストの御霊が私の中に生きていらしやるではないか。キリストと、かくして

私は一如になったから、キリストの僕なんです」

と。だから、ペテロもパウロも、「我を見よ」と言えたんす。

「罪の僕となりて死に至り……」とは、「罪の僕は直ちに死であり、従順の僕は直ちに義である」ということは、キリストの義をいただいているから、キリストの従順をいただいているから、従順であるのであつて、そうでなくて、「私は従順になった」なんて、そんなことは言えたはなしではない。「まだ、私は従順ではありません」なんてことを言っていたら、まだ律法の下だよ。

●義認と聖化

¹⁷然れど神に感謝す、汝等のもと罪の僕なりしが、伝えられし教の範^{のり}に心より従い、¹⁸罪より解放^{ときはな}されて義の僕となりたり。

パウロは更に常識的な言葉を使いながら言っているけれども、こういう言葉を読むとなにかこれを文字通りやって行こうなんて思うから、クリスチャンが躓いてしまうんだよね。そして、新しい福音的な律法の世界に入ってしまう。私に言わせると、そういうこと。



私という人間は非常に簡単なんだよな。困るよな、簡単すぎてしまつて。「義の僕」も「キリストの僕」も同じことです。

19 斯く人の事をかりて言うは、汝らの肉よわき故なり。

そういう「僕」という言い方でもつてね、「義の僕」だとか。

なんじら旧^{もと}その肢体をささげ、穢^{けがれ}と不法との僕となりて不法に到りしごとく、
モーセの律法に従っていない。

今その肢体をささげ、義の僕となりて潔^{きよ}に到れ。

「潔^{きよ}」は「ハギオス」という字です。神の聖意を体現していくから、「聖の中へと至れ」と書いてある。「潔^{きよ}」という言葉に躓^{つまづ}かないようにしてください。聖意、神さまの意、そこに聖があるんですから、この「聖」というのは人間的に何か潔さという、いわゆる潔癖式な潔さではない。自我のエゴイズムが抜けた世界を聖という。

プロテスタントの神学では「義認、聖化」なんていうね。キリストの十字架の贖罪を受けつつ義とせられる。信仰によって義とされる。あれが「義認」ということです。義と認められる。義認という言葉は、ヘタすると観念的に響いて困るんだ。

「アブラハム、エホバを信ず。エホバこれを彼の義となし給えり」

という。義^{よし}とする。それで結構だと。ということは、自分を何ものともしないことですよ。贖いとられた者は、自分は罪から外されて、自我から抜けたんです。信仰によって自我から抜けた。そして、キリストの従順の義を十字架の贖罪によっていただいたでしょ。「義とされた」ということです。だから、神さまとの関係がしつかり立った。神に対して「然^{しか}り」と、自分に「否^{いな}」と言うことになった。けれども、相対的な我々はいかわずダメですよ。躓いたり転んだりします。けれども、それが信仰における現実なんです。信仰における現実^いは義とされている。だから、マルチン・ルターが、

「我々は罪びとであり、同時に義人である」

という、二律背反がクリスチャンの矛盾構造だと言う。その通りです、地上においては。ローマ書7章のパウロとローマ書8章のパウロは別なパウロではない。ローマ書7章の解釈にはいろいろあるから、そのときまた言いますけれども。

今度はその実存の上でだんだん聖化^{せい}されていく。神の現実^いに鍛えられて、そして神中心に生きていく。そうすると、聖化されていくが、地上ではもちろんある程度しか行きはしない。

「栄光より栄光に至り、ついにキリストの姿に化するなり」

というのは向う側のはなしだ。けれども、もちろん義認と同時に聖化のことは始まっているんですよ、義認と同時に。具体的に神さまの、キリストの生命が入って来ているんだからね、聖霊によって。聖霊が入っていないければ、聖化なんて言えませんよ。

だから、地上では人間はどうしてもドラマチックな構造です。私の神学がドラマチック



だというのはそのことです。そのこともその一部分なんです。

●矛盾構造

「神さまがいるのになぜ、神さまは全能だということになぜ、地上は神さまの全能の力が働かないのか」

と、すぐ疑問になるんだよな。

「こういう悲惨な状態があるじゃないか、どうしてくれるんですか」

と。そういうように客観的にみたら、これは成り立たない。

「こんな不合理な世界に神さまがいるなんて信ずるのは身勝手なはなしだ」

ということになってしまう。

「なぜ、こんなことであるか。神さまの御意に反することがなぜこんなにたくさん行われているか」

と。それはもともと人間の自己中心から始まっている。そういった悲惨な状態を尋ねてみればみんなそこから来ている。神さまの側ではないんだ。実は我々の側の連帯責任からきている。それがいろんな因果関係でもって生じている。我々の側が本当に全部が信者になって、全部が本当になったら、そのいろんな矛盾構造がよほどよくなるでしょう。地上があたかも天国の如くなる。それは地上では望めない。聖書が言っているとおり、

「末の世には信を見んや」

なんて。いよいよダメになっていく。20世紀がこのまま続くか、21世紀がそのまま来るかわからない。ノストラダムスの予言の如くなるかわからない。

超大国といわれる国が本当に世界の平和を来らそうというならば、核兵器を、軍縮から軍備撤廃まで持っていかなければならない。けれども、地上は社会的に言っても殺人は行われているし、国際関係でも大きな殺人、戦争というのがある。これはみんなエゴイズムの働きです。問題は結局、宗教の魂の問題になる。ローマ書7章の問題になる。ローマ書7章で、

「ああ、われ悩める人なるかな」

と、パウロばかりが悩んでいるのではない。

「ああ、われ悩める地上なるかな、悩める世界なるかな。この死の世界から救

わんものは誰ぞや」

ということになる。神さまが全能なら、なにか大手段をやってくださいと。今に来ますよ、大手段が。天変地異が来て、世界が引っくり返ってしまう。黙示録に書いてあるようなことに成らないとはかぎらない。羔こひつじの怒りが生じないともかぎらない。必ずいつか来る。絶望的なんです。絶望的だけれども、しかし、絶望的だからやらないというわけにはいかない。どんなに地上は絶望的であっても、いや逆に絶望的であればあるほど、善きことをい



な意味において展開していかなければならない。社会学も試していかなければならない。結果を顧慮していたら何もできない。どんなに果を結ばなくても仕方がない。やることはやらなければ。

「神の御国を来らせ給え」

と祈る人は、そのように実存していなければ、本当は祈れないわけだ。御国を来らせるようなことをしてなければ。クリスチャンの礼拝がただ気分的な礼拝ではダメです。地道に日常生活それ自身が戦いの礼拝でなければ。そのためにも、

「日曜日は来なさいよ。どんなことがあつても、そいつを蹴飛ばして来なさい」

と、私は言っている。けれども、女の人はどうも弱いね。なにか負けてしまう。そこでは強くならないダメですよ、女性も。

本当の人間というものは、優しい面ともの凄い強い面と、即ち本当の男性と女性を、その両面を、女性も男性も持つていなければならない。これが本当の人間なんです。仏さんの顔を見ていると、あれは男だろうか、女だろうか。では中性かと。そうじゃない。男性的なものと女性的なものと両方兼ねている。中性ではない。あれが本当の顔なんです。あれが人間なんです。永遠に男性的なものと永遠に女性的なものを持つているのが永遠に人間的なものだという。これはキリストであつた。キリストが両方を持つていらつしやつた。お釈迦さん以上に。あの「山上の垂訓」は女性道です。あの女性道が実は即、男性道なんです。神さまの前に本当に無力であるときに本当に強力になる。本当に従うという人が逆に本当に強い。これが分からないんだよな、今のいわゆる民主主義なんて言っている連中には。だから、パウロさんがここで言っているところは、本当に実は非常に大事な人間道なんだ。そういう人は、戦うときにはピシャと戦えるんです。キリストに従っているんだから。他のものに従わないんだから。本当の「何をか」というのはそこから出てくる。またあるときは――「何をか」なんて言う必要はない――本当に黙って耐え忍んで担つてしまう。その時その時で自由自在です。

●聖霊漬け

²⁰なんじら罪の僕たりしときは義に対して自由なりき。

義に対しては勝手気儘で、この場合の自由とはそういう自由だった。

²¹その時に今は恥とする所の事によりて何の実を得しか、これらの事の極^{はて}は

死なり。

死と地獄とサタンの手下ということ。

²²然れど今は罪より解放されて神の僕となりたれば、

サタンの勢力から抜けて、神さまの支配するところとなつたから、神の僕となつたから。逆に言うと、天国人となつたからということ。神の支配するところが天国だから。「バシレ



「イア」というのはそういう字だ。神の支配するところ、即ち、神の僕ということは、別な言葉でいうと、天国人ということだ。天国人となつたら、

潔きよにいたる実を得たり、

本当の聖なる御国の民である。それなら聖徒ですよ、まさに。聖徒であり、御国の民である。神の民です。聖の字を私してはいかんけれども、私たちは賜りたる聖の人だから。

その極はては永遠としかえの生命いのちなり。

永遠の生命である。永遠の生命は、死んでも死なないと同時に、人を生かすんです。キリストは私たちを生かし、また私たちは別な人を生かさなければいかん。永遠の生命を人に与える。生命づけるわけです。我々は聖霊づけになってなければダメだよ、漬け物に。聖霊漬けになっていなければ。御霊漬けの人になっている。御霊漬けになって相手を生命づけるわけです。

23 それ罪の払う価は死なり、然れど神の賜物たまものは我らの主キリスト・イエスにありて受くる永遠の生命なり。

「キリスト・イエスにありて」は「エン・クリスト」です。エン・クリストであるから、「ゾーエー・アイオニン」(永遠の生命)であると。

● 僕の書

「僕しもべ」という言葉は、聖書に始めから終りまで出ている。聖書は「僕の書」と言ってもいいくらいです。創世記26章24節に、

「24 その夜エホバ彼にあらわれて言いたまいけるは、我は汝の父アブラハムの神なり 懼るるなかれ 我汝と偕めぐにありて汝を祝めみ 我が僕アブラハムのために汝の子孫を増さんと。」(創世記26・24)

アブラハムのことを神さまは、「我が僕アブラハム」と言いました。これは大事なところだね。それから、土師記6章27節、

「27 ギデオンすなわちその僕十人を携えてエホバのいいたまひしごとく行えり」(土師記6・27)

ギデオンにたくさん僕がいた。ギデオンという神の勇者がいました。このギデオン自身が神さまの僕みたいな人ですが、ここにはそういう言葉は書いてないけれども、ギデオンはそういった僕が十人いたという。

それから、サムエル前書23章10節、

「しかしてダビデいいけるは イスラエルの神エホバよ、僕たしかにサウルがケイラにきたりてわがために此の邑まちをほろぼさんと求むるを聞けり」(サムエル前23・10)

ダビデ自身が自分を神さまに対して「僕」と言ってます。



サムエル前書25章10節に、「主人を捨てる僕が多い」という言葉もある。

「ナバル、ダビデの僕にこたえていいけるはダビデは誰なるエサイの子は誰なるこの頃は主人をすてて遁逃^{のが}る僕おおし」(サムエル前25・10)

「ダビデの僕」という言葉もある。

サムエル前書25章41節に、

「アビガルたちて地にふして拝しいけるは視よ婢^{しもめ}はわが主の僕等の足を洗う仕女^{つかえめ}なり」と(サムエル前25・41)

僕たちの足を洗うというように書くことが書いてある。キリストは自分の弟子たちの足を洗いましたが。ここに「婢^{しもめ}」という言葉が出ている。このサムエル後書3章あたりにはたくさんそんな字が出ている。

●エホバの僕

それで、何といっても大事なところはイザヤ書における「エホバの僕」のところですよ。キリストはエホバの僕でありましたが、その預言として出ているのが42章から五つばかりある。イザヤ書53章になってエホバの僕の極限にたつしているわけですが。イザヤ書42章1節、

「わが扶^{たす}くるわが僕わが心よろこぶわが撰^{えら}び人を見よ。我わが霊^{みたま}をかれにあたえたり。かれ異邦人に道をしめすべし。」(イザヤ42・1)

僕は、御霊が与えられないと、僕でないわけです。「霊^{みたま}を与え給う神」という言葉が5節にある。

「天をつくりてこれをのべ、地とそのうえの産物^{なりいもの}とをひらき、そのうえの民に息をあたえ、その中をあゆむものに霊^{みたま}をあたえたもう神エホバかく言い給う。」(イザヤ42・5)

イザヤ書43章1節の、

「ヤコブよなんじを創造せるエホバいま如此いい給う。イスラエルよ汝をつくれるもの今かく言給う。おそるるなかれ我なんじを贖えり。我なんじの名をよべり。汝はわが有^{もの}なり。」(イザヤ43・1)

と。この「わが有^{もの}なり」ということは、要するに「わが僕なり」ということを別な言葉で言っている。10節に、

「エホバ宣給く、なんじらはわが証人^{あかしびと}わがえらみし僕なり」(イザヤ43・10)

と書いてある。僕は証人^{あかしびと}にならなければダメなんです。僕は神さまの、キリストの証人、証者であるのが本当の僕の実だ。僕の実は証者であること。証者にならなかったら、僕なんて言ったって空名にすぎないと。44章1節に、

「されどわが僕ヤコブよわが撰^{えら}みたるイスラエルよ今きけ。

即ち、僕はみんな選ばれたものだよ。ここは民族だけでも、個人でも同じことだ。



2 なんじを創造しなんじを胎内^{はらのうち}につくり又なんじを助くるエホバ如此^{かく}いたもう。わがしもべヤコブよわが撰^{えら}みたるエシユルンよおそるるなかれ。3 われ渴けるものに水をそそぎ、

「水」は聖霊と同じこと、

乾^ひたる地に流れをそそぎ、わが霊^{みたま}をなんじの子輩^{こら}にそそぎ、わが恩恵^{めぐみ}をなんじの裔^{すえ}にあとうべければなり。」(イザヤ44・1～3)

「霊^{みたま}」と「恩恵」がまた同義語に使ってある。そういう言葉が自然に出てくるんです。26節に、

「26 われわが僕のことばを遂げしめ、わが使者^{つかい}のはかりごとを成らしめ、」(イザヤ44・26)

と。僕は「神さまの使者」であるわけです。ヘブライ語の言葉というのは同義語をよく並べて使っている。この辺はみんな詩文ですから。僕はまた証者であると共に使者である。エンジェルである。アングロスである。

そして、「僕」は本当に御霊をいただくと今度は、本質的に「子」になる。私たちは「神の子」なんです。だから、僕は使^{つかい}命的な本質で、子は質^{しつ}的な本質なんだ。質的には、キリストの御霊をいただいたものは子なんです。「アバ、父よ」と呼べるではないですか。御霊をいただかなければ、「父よ」とは呼べない。「お父さま」と呼べるのは御霊が来ているから呼べるので、御霊が来ないで、いきなりたたいい加減に「お父さま」なんて言っては困るよ。

「天にまします我らの父よ」

というあの祈りは、聖霊が来てなければ本当は祈れないんだ。

楽しいではないですか。そういうわけです。そして、僕は権威を持つんですよ。聖霊の人は本当の権威を持っている。そこで「自主」なんて言ってるのよりかよつぽど凄い権威を持っている。今度は本当の自主なんです。キリストくらい自主の人はない。ところが、キリストくらい僕の人はない。民主主義なんて言ったって、本当はそこから来なければ、本当の自主性なんてものはないんですよ。そうでないと、みんな自我的な、我執的な自己主張だ。だから、何といったって、福音に来なければダメなんだ。

